☆　「学び方」を選べる学習の実践例

それぞれの学び方があることは、第Ⅱ章―１（３）⑦『それぞれの「学び方」』（63Ｐ）で分かったけど、じゃ、どうやって指導すればいいの？

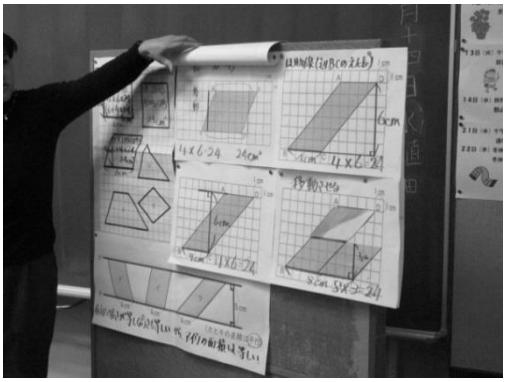
学級全員の学び方が違うことを前提として、あらゆる角度から「学び方を自分で選択できる授業内容のしかけ」を用意しておくと、理解の深まりがスムーズになります。

「学び方」の例として第Ⅱ章―１☆⑦『それぞれの「学び方」』（66Ｐ）で紹介したタイプ

タイプ A→視覚型	タイプ B→聴覚型	タイプ C→体得型
目で見て情報を理解したり覚えたりするのが得意	耳で聞いて情報を理解したり覚えたりするのが得意	実際に体を動かして理解したり覚えたりするのが得意

＜実践例の紹介＞

教材との出会い

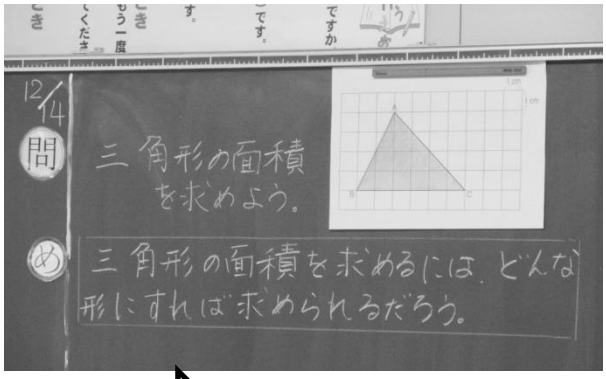


・繰り返し聞いて覚える子ども
・図を見て覚える子ども
・具体的な操作を思い出して覚える子ども

学び方を選べる

既習事項が確実に定着し、次の学習につなげることができます。

学習課題の把握

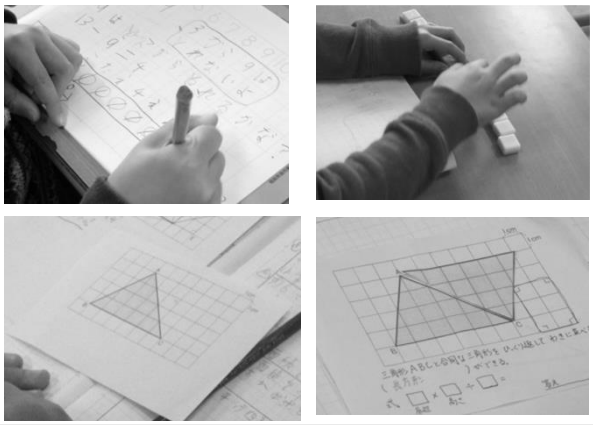


・問題を聞いて考える子ども
・絵や図から考える子ども
・その両方を使って考える子ども

学び方を選べる

問題を理解し、深めていくことができます。

個での追究・解決

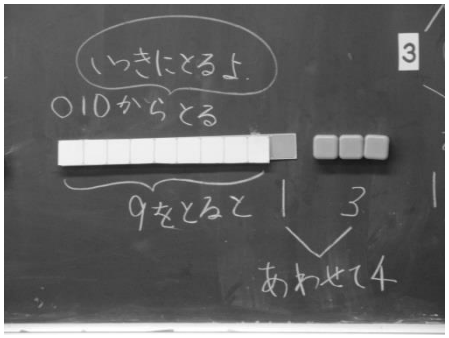


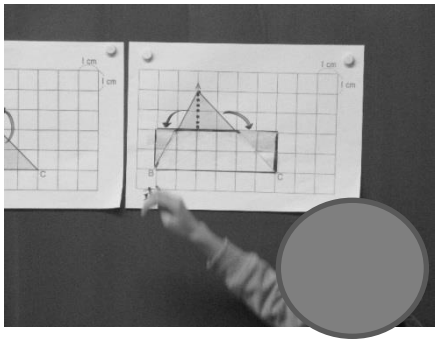
・図や絵を見て考える子ども
・具体物を操作して考える子ども

学び方を選べる

自分なりの手がかりで、思考の深まり、理解の深まりを手助けします。

学級全体での追究・解決





追究・解決の際にも、話す、見る、操作する、といった活動を組み合わせて発表を促すことで、それぞれの理解のポイントが含まれ、より学級全員の学びの理解が深まります。

【授業の基盤の一つとして】

それぞれの「学び方」を用意し、子どもたちが選択できる授業は、必然的に理解が深まり、より活発な学び合いの授業を展開することができます！なお、平成 29 年４月『ふくしまの「授業スタンダード」』の中で、授業の基盤として、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに努める。」としています。

ただ、毎時間、全てを用意して、丁寧に行うことは難しい！！ですよね。
だからこそ、シンプルに

- □ チョーク一本でできる視覚的な支援（色分け、図示等）
- □ 写真が多い資料の積極的活用
- □ 授業中の発問の工夫、短い指示、復唱、要点の繰り返し
- □ 身近な具体物を用いた操作的活動

今あるもので、できること･･･工夫してみませんか？